

# 三世代の成人期知的障がい者家族にみる「予測可能性の低下」

谷村ひとみ TANIMURA Hitomi

立命館大学大学院 先端総合学術研究科 日本学術振興会特別研究員

E-mail : lt115033@ed.ritsumeai.ac.jp

## 問い

◆三世代の成人期知的障がい家族が経験した「予測可能性の低下」とはどのようなものか？

◆どんな支援が必要だったか？

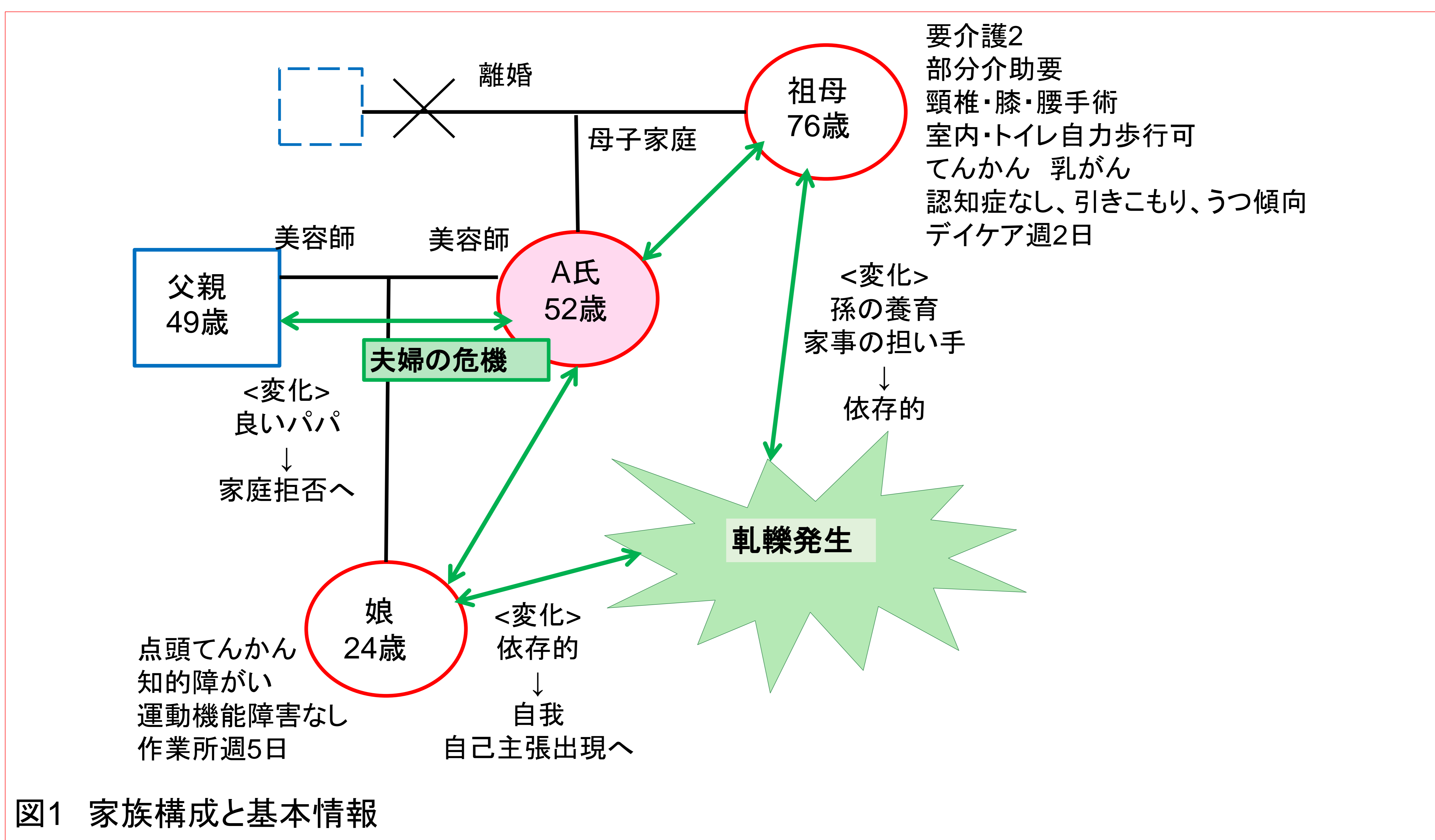
## 問題と目的

問題: 知的障がい者家族に届く保護と配慮は、せいぜい養護学校卒業までであり、卒業後のロールモデルの不在から成人期障がい者家族には「予測可能性の低下」の問題がある(中根 2006)。しかし、長寿化は成人期障がい者家族に祖父母の老いもつきつける。

目的: 3つのライフサイクルが交差する三世代の成人期知的障がい者家族に起こった「予測可能性の低下」とは、どのようなものか、どんな支援を必要としたのかを明らかにする。

## 方法

三世代の成人期知的障がい者家族の50歳代の母親(以下、A氏)を対象に、8年に渡りインタビュー調査を行い、知的障がいをもつ娘の作業所入所前、作業所入所後、現在に時期区分し家族変化の経緯を分析した。



## 結果と考察

◆A氏が経験した「予測可能性の低下」とは… 3つのライフサイクルが交差する家族の混乱と夫婦の危機

成人期知的障がい者家族移行期: 作業所入所前後 入所前の娘は自己主張も一人での外出経験もなく、新しい環境への心配があったが、「意外」にスムーズに適応した。同じころ、これまで娘の養育や家族を支えてきた祖母(以下、実母)の老いが進み、急激なADL低下とともに「ケアする人」から「ケアされる人」になった。これまでの家族関係になんらかの変化が迫られた。

混乱期: 作業所入所2~3年後 作業所での経験で娘はあふれんばかりの自己主張を見せ始めた。一方、引きこもりがちな祖母を家庭以外の「場」としてデイケアに通わせるが、デイケアでの「子ども扱いされる」ストレスが加わり依存的態度と暴言が増大し、孫(娘)の自己主張と祖母(実母)のぶつかり合いで家庭はA氏を挟んで混乱状態になった。夫は娘の成長は理解できても、祖母の態度には納得がいらず家族から遠ざかり始める。A氏は「自分の親のことだから、夫に迷惑をかけられない」と、先の見えない家族の在り方に一人困惑していく。

危機期: 作業所入所4~5年後 混乱状態が続くなか夫は離婚を切り出し、A氏はたった一人で祖母と娘を看なければならぬというはかり知れない重圧と先の見えなさ、そして「自分は逃げられない」というジレンマに押しつぶされていく。「人生のなかであの時が一番辛かった」といい、A氏はすべてにおいて予測不可能になった。

再構築期: 1年前~現在 夫から離婚申し出の取り消しと「俺は逃げていた、これからは一緒にやっぺいこう」という言葉を受け夫婦の危機を脱した。A氏は落ち着きを取り戻し、祖母と孫に対して「お互いそれぞれが頑張っている」と余裕ができた。現在、娘の終の棲家、祖母の老いへの対応、A氏夫婦の老後について模索している。

◆どんな支援が必要だったか? … A氏が挙げたのは2つ! ①夫という伴走者 ②祖母に合った支援

①A氏の家族は、重度の障がいや老いでないことから家庭外部で支援を受けている。それは逆に家庭内部には支援が入らない状況といえる。この状況で唯一、巻き込まれず家族内部の問題を共有し合えるのは誰か? それは夫(父親)ではないだろうか。

②祖母がデイケアを「子ども扱い」と嫌がったように、高齢者の支援は多様な対象を一定の空間で一括りに扱う傾向がある。個々人への適切な支援がなされるならば高齢者を家庭内から家庭外へと向かわせるのではないだろうか。

<文献> 中根成寿(なかね なるひさ), 2006, 『知的障害者家族の臨床社会学——社会と家族でケアを分有するために』明石書店。